

令和 2 年 6 月 22 日現在

機関番号：12101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02834

研究課題名(和文) コミュニケーション活動と一体化した新たな文法指導方法の提案

研究課題名(英文) Grammar instruction using communicative activities

研究代表者

永井 典子 (Ngai, Noriko)

茨城大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：60261723

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日本語の母語話者が中等教育で習得する英語の文法項目をCEFR(COE 2001)の6段階の熟達段階に分類し、対応する日本語の文法項目と比較対照し、両言語の類似点と相違点を明示した。そのうえで、日本語を母語とする、同一熟達段階の大学生の英語学習者が英語の受動態の知識をどの程度有するのかを調査した。この調査結果をもとに、日本語と英語の受動態の類似点と相違点への学習者自らの気づきを促進させる言語活動及びタスクをCEFR/CV (COE 2018)の能力記述文などを参照し、提案した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、日本語を母語とする大学生の英語学習者は、英語の熟達段階が同一レベルでも学習する英語文法項目に関して、母語との相違点や類似点に関して認識が異なり、第二言語習得における言語間の影響(CLI)の研究結果で提案された主観的類似点と相違点の下位区分に基づき、3つのタイプに分類できることを明らかにした。この研究成果を基に、単に英語の文法項目を事実として教え、それらを適切に使用できるかどうかの結果に着目するのではなく、日本語と比較対照しながら英語文法を深く理解するプロセスに焦点を当てた言語活動やタスクを提案したことに学術的かつ社会的意義がある。

研究成果の概要(英文)：This research proposed language activities and tasks which help learners notice grammatical similarities and differences between English and Japanese and lead them to deeper understanding of the construction. The research first classified English grammatical constructions that are learned during the secondary education into the six proficiency levels of the CEFR and then made a contrastive analysis between the English constructions and their corresponding Japanese grammatical constructions. The study also tested how Japanese students perceive grammatical similarities and differences between the languages, using the passive and found that three types of learners exist. Based on this research result, the study proposed language activities and tasks which help learners become aware of crosslinguistic similarities and differences.

研究分野：言語学

キーワード：英語文法指導 日英対照研究 CEFR CEFR/CV 言語活動 タスク

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

英語教育における文法指導は、これまでに多くの提言がなされており、明示的な文法指導の重要性は、Norris & Ortega (2000)など、多くの実証研究で明らかにされている。また、コミュニケーション活動の中で文法指導を行うフォーカス・オン・フォームのアプローチが提唱され (Long 1991)、意識高揚タスク (Ellis 2003)など、具体的なタスクも提案されている。さらに、Pienemann (1989)の Teachability hypothesis で示されたように、学習者の熟達段階に応じた文法指導が重要なことも明らかにされている。つまり、学習者の熟達段階に応じたコミュニケーション活動と一体化した新たな文法指導方法を提案することが喫緊の課題であると言える。

日本国内でもコミュニケーション活動と有機的に関連付けた文法指導書は存在するが (泉 2009、高橋 2010)、目標文法項目を学習者の熟達段階に対応させ、それらに最適なコミュニケーションタスクを提案した文法指導書は、これまでのところあまりないように思われる。コミュニケーション活動と一体化した文法指導方法を提案するためには、どの目標文法項目がどのようなコミュニケーションタスクの遂行に必須なのかを、その文法特性と機能を把握したうえで特定しなければならない。そこで、CEFR の熟達段階に対応した目標文法項目の文法特性と機能を明らかにしたうえで、最適なコミュニケーションタスクを特定し、コミュニケーション活動と有機的に関連付けた新たな文法指導方法を提案するという研究に取り組むこととした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、日本語を母語とする英語学習者の熟達段階に応じた目標文法項目を、コミュニケーション活動と有機的に関連付けて指導する新たな文法指導のあり方を検討し、提案することである。そのために、以下の3つのことを行った。

- (1) 熟達度別目標文法項目の特定、及びその文法特性の明確化
- (2) 目標文法項目に最適な言語活動を通じた言語活動・タスクの提案
- (3) 熟達度別目標文法項目の新たな指導法の提案

3. 研究の方法

上記の(1)の研究目的に関しては、Hawkins & Filipović (2012)が示した英文法の基準特性 (Criterial features in L2 English) に基づき、日本語母語話者が中等教育で習得する英語の文法項目を CEFR の6段階 (A1-C2) に分類し、それら文法項目の特性を明確にする。さらに、熟達段階別の文法項目の知識を当該の熟達段階の学習者がどの程度有しているのかを調査する。

(2)の研究目的に関しては、CEFR の異なるモードの言語活動の能力記述文を精査し、目標文法項目を習得するのに最適な言語活動やタスクを開発する。

(3)の研究目的に関しては、(1)と(2)の結果を総合的に考慮し、日本語母語話者を対象とした、熟達度別目標文法項目の指導方法を考案する。

4. 研究成果

(1) 熟達段階別の文法項目に対する当該レベルの学生の知識

日本の中等教育で習得する英語文法項目を Hawkins & Filipović (2012) が示した英文法の CEFR の6段階の基準特性 (Criterial features in L2 English) や English Profile の分類に基づき、CEFR の6段階に分類した。そのうえで、これまでに蓄積された日英語の対照研究を精査し、A2・B1 レベルの英語の文法項目と対応する日本語の文法項目と比較対照し、それらの類似点と相違点を明らかにし、日本語を母語とする英語学習者が習得困難になると想定される語彙・統語構造を特定した。しかしながら、客観的に分析された両言語の相違点がすべて学習者にとって等しく学習困難になるのではなく、母語と目標言語間に存在する類似点及び相違点を学習者がどのように認識しているのかにより、母語が第二言語習得に与える影響が異なることが近年の第二言語習得における言語間の影響 (CLI) 研究で明らかにされている。

そこで、日本語を母語とする英語学習者を対象とした英語受動態の知識調査を行った (Nagai et al., 2016)。さらに、その結果を Jarvis (2000)、Jarvis & Pavlenko (2007) が提唱した「主観的類似性と差異性」の下位区分である、「認識された類似性と差異性」(perceived similarities/differences)、及び「想定された類似性と差異性」(assumed similarities/differences) に基づき、再分析した。その結果、日本語を母語とする英語学習者は、熟達度が同程度であっても、日英語の受動態の類似点と相違点の認識の仕方が異なることが明らかになった。つまり、日英語の受動態の類似点と相違点の認識の仕方に関して3つの学習者グループが存在することが明らかになった。それらは、日英語の受動態の類似点と相違点を正確に認識している学習者グループ、類似性と差異性を認識はしているがその相違点を適切な英語で表現できない学習者グループ、日英語の類似点を誤って想定し、誤った英語表現をしている学習者グループである (Nagai, to appear)。

(2) 目標文法項目に最適な言語活動を通じた言語活動・タスク

(1)で述べたように、日本語母語話者の英語学習者が同一熟達段階 (A2 レベル) であっても、特定の目標文法項目と対応する母語の文法項目の類似点と相違点を、等しく認識しているわけではない。つまり、同一熟達段階の学習者の中には、目標文法項目を正確に使用できる学生もいれば、誤用する学生も存在することになる。このことから、目標文法項目を指導する際には、た

だ単に言語事実を学習者に伝え、使用するタスクを考案するのでは充分ではなく、学習者自らが目標文法項目と対応する母語の文法項目の間に存在する類似点と相違点に気づくことができるコミュニケーション活動やタスクを考案する必要がある。

そこで、専門内容と言語を統合して学習する Content and Language Integrated Learning(以降、CLIL)アプローチを精査し、英語の文法項目と日本語の文法項目を比較対照しながら、学習者自らが相違点と類似点に気づくための言語活動とタスクを考案することとした。また、具体的なタスクを考案するために、ヨーロッパ評議会 (Council of Europe、以降 COE) が 2017 年 9 月に発表した暫定版、及び 2018 年 2 月に出版された完成版の Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment Companion Volume with new descriptors (以降 CEFR/CV) を検証した。特に、CEFR/CV に新たに加わった Mediation (媒介) モードの言語活動の能力記述文を精査し、言語が学習者の内容理解を深めるための言語活動について探求した。

(3) 日本語母語話者を対象とした、熟達度別目標文法項目の指導方法

まず、英語の受動態の学習を例に、どのような言語活動を通して、2 つのタイプが存在する日本語の受動態と 1 つしかない英語の受動態の相違点と類似点に気づかせる言語活動とタスクを提案した。CEFR/CV (COE 2018) を参考にして、reception, production と mediation の 3 つの異なるモードの言語活動を特定し、Reading for information and argument、Processing text in writing、Streaming a text、Explaining data in writing、Collaborating to construct meaning、Linking to previous knowledge、Explaining data in speech、及び Writing reports and essays 活動の能力記述文中、A2 レベルと B1 レベルの記述文をもとに具体的なタスクを考案した (Nagai, 2020)。

(4) 今後の展望

本研究当初は、コミュニケーションツールとしての言語の役割に焦点を当てた言語活動とタスクの開発を目指していたが、CEFR/CV の出版 (COE 2017, 2018) CLIL 教育研究の近年の動向をもとに、言語の認知的役割、つまり、物事を深く理解し、高等教育に必要な認知技能を習得するための道具としての言語に着目し、英語と対応する日本語の文法項目を比較対照しながら学ぶ学習方法へと転換した。この研究は、現在までに英語文法指導を、英語と日本語の受動態の比較分析を通して学習する方法を例に挙げ、提案している。今後は、他の文法項目、特に明確にルール化されにくい文法項目、例えば冠詞や時制などに視野を広げ、認知ツールとして言語を使用し、日本語と英語の類似点と相違点をより深く理解していくと同時に、分析能力、課題解決能力やプレゼンテーション能力といった認知技能の発達を促進する言語教育方法を提案していく予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Nagai, Noriko	4. 巻 2
2. 論文標題 Some J-CLIL reflections; Implementing CLIL to a linguistics course	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 JJCLIL	6. 最初と最後の頁 152-159
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Schmidt Maria Gabriela, Nagai Noriko, Naganuma Naoyuki, Birch Gregory	4. 巻 9
2. 論文標題 Teacher development: Resources and devices to promote reflective attitudes toward their profession	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Language Learning in Higher Education	6. 最初と最後の頁 445 ~ 457
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1515/cercles-2019-0024	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 1件/うち国際学会 4件）

1. 発表者名 Nagai, N., Ayano, S., Okada, K. & Nakanishi, T.
2. 発表標題 Explicit instruction on the other side of the same coin: A case for passive and causative
3. 学会等名 XIV CercleS International Conference（国際学会）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Nagai, Noriko
2. 発表標題 Consciounness raising tasks: To develop learner' reflective attitude toward plurilingualism
3. 学会等名 XV CercleS International Conference 2018（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Schmidt, M.G., Nagai, N., Naganuma, N. & Birtch, G.
2. 発表標題 Teacher development: Resources and devices to promote reflective attitude toward their profession
3. 学会等名 XV CercleS International Conference 2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Schmidt, M.G., Nagai, N., & Birtch, G.
2. 発表標題 CEFR-informed Teacher Training and Development
3. 学会等名 全国語学教育学会・第44回年次国際大会 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Nagai, Noriko
2. 発表標題 How to design CLIL courses?
3. 学会等名 J-CLIL
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 O'Dwyer, F. Hunke, M. Imig. A. Nagai, N. Naganuma, N & Schmidt, M.G.	4. 発行年 2017年
2. 出版社 Cambridge University Press	5. 総ページ数 333
3. 書名 Critical, Constructive Assessment of CEFR-informed Language Teaching in Japan and Beyond	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----